

山岳部「薬師岳遭難」

山田義郎

〈卒業生〉

I. 43年ぶりの用語「豪雪」

平成18（2006）年は北陸・信越地方を中心に大変な降雪で、死者152人（'06/12/2読売・朝13面「あなたが選ぶ10大ニュース」記事より）と大きな被害がでて「豪雪」という言葉が使われました。豪雪という用語の使用は「38〔サンパチ〕豪雪」（昭和38年、1963年、死者228人——前出記事より）以来のことと云われ、その降雪被害の様子が思いやられることでした。「平18豪雪」の呼び名から蘇った「38豪雪の経験」を振り返り、手元の遭難資料を整理してみます。



樹林帯を行く（3月捜索、1,900m 三角点付近）

愛知大学山岳部の北アルプス薬師岳遭難は、豪雪の昭和38（1963）年1月に発生しました。

遭難の年（昭和38、1963年）前後の出来事を拾ってみますと「'60年（昭和35）安保闘争を契機とした政治の季節の終わり」と高度経済成長の時期」（色川大吉『昭和史世相編』'90年、小学館刊）の脈動を顕著に示しています。

1962（昭和37）年

- 2月1日 東京の人口1,000万人を突破
- 4月 名古屋テレビ開局
- 8月12日 堀江謙一氏、小型ヨットで太平洋横断
- 8月30日 わが国、戦後初の中型旅客機YS11、初飛行成功
流行歌「王将」「可愛いベイビー」、
「ツイスト」流行

1963（昭和38）年

- 1月1日 フジテレビ、「鉄腕アトム」放送開始
- 1月23日 「38豪雪」。北陸地方に大雪、北陸・上信越線全線運休。死者228人
- 3月31日 東京入谷で「村越吉展ちゃん事件」
- 6月5日 黒四ダム完成。「こんにちは赤ちゃん」流行

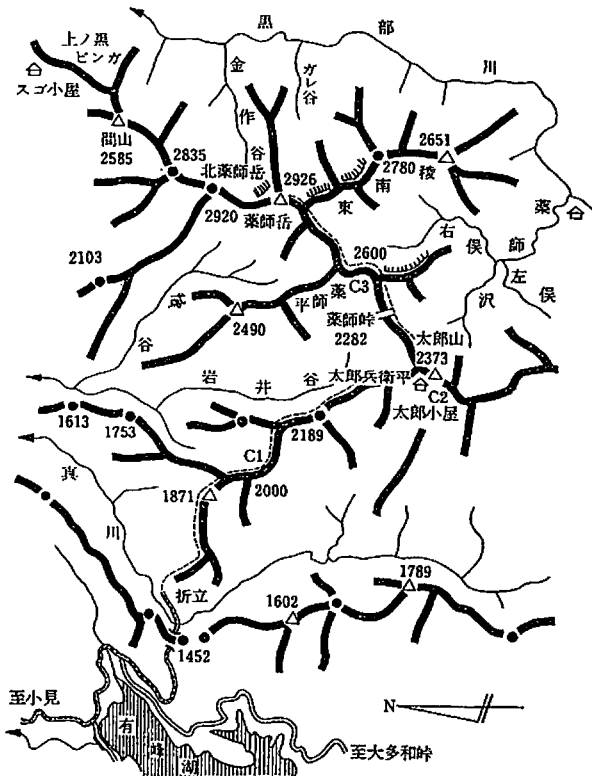
1964（昭和39）年

- 6月16日 新潟大地震
- 10月1日 東海道新幹線開業
- 10月10日 東京オリンピック開幕

II. 山岳部冬山合宿計画

—山岳部員、太郎小屋に入る

1952（昭和27）年創立の山岳部は、遭難当時、23名の部員が所属する大所帯で遭難事故が発生した「昭和37年度冬山合宿計画」では、この薬師冬山合宿に当初は20名の部員参加が予定されていました。これまで冬山合宿は鹿島槍周辺（東尾根、天狗尾根、鹿島槍～五竜岳）で行ってきていましたが、ヒマラヤ遠征をも視野に置いて積雪期の剣岳～穂高縦走で実力を付けておこうという長期計画の初年度で、部全体としての意気も高揚していました。冬山合宿は7名のメンバーが就職活動などその他の都合で不参加となり、結局、13名のメンバーが1962（昭和37）年12月25日23時55分、名古屋発富山行き準急「白鳥」で出発。富山から富山地鉄千垣駅（有峰口）を經由、有峰林道の途中まで荷揚げにトラックを利用して、26日、有峰ダムサイトに入りました。



薬師岳周辺概念図

（『愛知大学同窓会設立40周年記念誌』61頁）

合宿参加メンバー 13名（敬称略、学年学科と出身地）

- ①山田脩（経4）名古屋、②林田安男（経4）岐阜、③鈴木俊彦（経2）桑名、④加藤克宣（経2）名古屋、⑤春日井幹二（法2）豊橋、⑥武藤利幸（法2）半田、⑦尾崎武彦（経2）豊橋、⑧鳶田郁夫（経1）春日井、⑨八橋義政（法1）一宮、⑩横地哲（法1）名古屋、⑪福島彰（経1）名古屋、⑫牛田正伸（経1）名古屋、⑬小田和宏（経1）豊橋

さきに述べた積雪期の剣～穂高縦走の長期計画は、剣岳から穂高岳までの間を剣岳周辺、薬師岳周辺、三俣蓮華岳周辺、槍ヶ岳西鎌尾根周辺、槍・穂高岳周辺の5ブロックにわけ順次に積雪期の合宿を行い、その経験のもとに積雪期・剣～穂高岳の縦走踏破を狙っていました。さらには、そこで培った実力をもとに愛知大学隊としてのヒマラヤ遠征実現の夢を描いていました。

合宿に参加したメンバーは4年生2名、2年生5名、1年生6名の合計13名。所属部員の退部によって3年生部員が欠落した変則形態でした。さらに山岳部としては4年生の卒業を控えて2年生部員のなかから早急に次期リーダーを選出しなければならないという課題をも抱えていました。このため、今回の合宿では次期リーダー選定のために2年生部員3人（鈴木俊彦、加藤克宣、春日井幹二）をリーダー候補として選び、合宿運営は、その3人のリーダー候補の合議制によって行い、現リーダー山田脩（経4）はその3人の上立って合宿全体を見守ることになっていました。実際、冬山合宿の計画、荷揚げ、偵察山行などの合宿体制づくりは3人のリーダー候補を中心に推進してきました。この体制での合宿推進については山岳部役員とOB会役員とでもっていた連絡会でも懸案で、最後の連絡会（12月15日、名古屋広小路・和田コーヒー店）で確認されていました。

一方、後日、愛知大学山岳部と行動をともにすることとなる日本歯科大学山岳部6名は、12月24日夜、上野出発、富山、土、大多和を經由し

て岐阜県側から27日、有峰に入っています（両隊の動きについては行動表参照）。

III. 搜索活動の開始——「総費用1億円」とも云われた搜索の始まり

山岳部提出の合宿計画書によれば、下山予定日1月6日、予備日8日間となっていました。ところが全予備日を消化しきった下山予定日1月14日になっても下山の連絡はなく、即刻、同日中に大学（山岳部長・教授杉本出雲先生、監督・一柳敏正OB）は富山県警に搜索願を届出し、救援対策本部（委員長・教授胡麻本篤一先生）を車道校舎に設置しました。

翌15日、中日本航空(株)小型双発機「ダフ」をチャーターして9:00小牧空港発、太郎小屋、薬師岳周辺の上空搜索を行い、山岳部員宛のピラ13,000枚をまいて呼掛けを行いました。なんら手掛かりを得ることはできませんでした。

同日午後、山岳部OB8名、現役6名が搜索隊として名古屋を出発、富山で富山県警（警察官9名、ガイド1名）と合流して第1次搜索救援隊を編成、高山線猪谷へ戻ってトラックに乗り継ぎ土集落へ。その後は徒歩でまずは有峰へ向いましたが、来る日も来る日も浴びせかけるような雪の日ばかりで、跡津～大多和集落までは跡津集落の人たちが、大多和～大多和峠までは大多和集落の人たちが降りしきる雪の中をくぐるようにしてラセッセルしていただき、不安の募る搜索救援隊には心温まる想いでした。

これが「搜索の総費用、1億円」といわれる大搜索の始まりでした。

1. 1月搜索

（第一次搜索救援隊出発、愛知大学山岳部関係者と富山県警合同隊1/15-1/30）……名古屋出発—富山着—猪谷—大多和—折立BC（ベースキャンプ・神高木材(株)飯場)—1,900m三角点—太郎小屋—薬師平）

- ① 1/15(火) 15:40ひだ2号名古屋発、富山着20:29。同朝、ピラ撒き（中日本航空）
- ② 1/16(水) 富山発（10:04）—高山線猪谷駅、土集落経由—跡津集落民家宿泊
- ③ 1/17(木) 跡津集落—大多和集落民家宿泊
- ④ 1/18(金) 大多和集落—有峰西谷・神高木材(株)事務所
- ⑤ 1/19(土) 有峰猪根平・前田建設寮宿泊
- ⑥ 1/20(日) ——休養日——
- ⑦ 1/21(月) 有峰猪根平—折立BC（神高木材(株)飯場）
- ⑧ 1/22(火) 折立BC—1,900m地点
朝日新聞ヘリ、太郎小屋に強行着陸、「来た、見た、いなかった（朝日、1/22、夕）」
〔紀元前47年6月、カイサル（53歳）、小アジア遠征、カッパドキア地方ゼラでフルナケス軍を破ったローマへの報告“VENI, VIDI, VICI 来た、見た、勝った”より〕
「太郎小屋に人影なし（中日、1/22、夕）」
- ⑨ 1/23(水) 悪天候のため停滞
- ⑩ 1/24(木) 悪天候のため停滞
- ⑪ 1/25(金) 1,900m地点—太郎小屋に到着（薬師平搜索）。太郎小屋に入った第一次搜索隊メンバー9名
〔富山県警〕長崎、松木両氏
〔ガイド〕佐伯文蔵氏（剣沢小屋主人）
〔愛知大学〕（敬称略）山田義郎（OB）、富田健治（法4）、花井好己（経4）、花井純（経4）、斎哲雄（経4）/高田光政（名古屋山岳会）
- ⑫ 1/26(土) 太郎小屋（薬師平搜索）。本間喜一学長・辞表提出。「たとえ大学がつぶれても搜索活動は続ける」
- ⑬ 1/27(日) 太郎小屋撤収（11:00）、午前中、薬師平搜索、これで第一次搜索活動打ち切り。14:30ごろ折立BCに帰着。同日午後、小屋の遺品、ヘリで富山へ
- ⑭ 1/28(月) 第一次搜索隊の大半のメンバーは自衛隊ヘリで富山帰着。午後、天候悪化の



徒歩で太郎小屋へ入った第1次捜索隊と折立BCからのサポート隊（1月23日ごろ、1,900m、第1キャンプで）

ためへり輸送中止。第一次捜索隊半数は折立BC泊

- ⑮ 1/29(火) 天候悪く自衛隊へり飛ばず。徒歩で帰途に着く。折立BC一大多和（泊）
- ⑯ 1/30(水) 大多和一猪谷一名古屋。16:00救援対策本部
- ⑰ 1/31(木) 遺家族/大学関係者へ捜索報告会（車道校舎）
- ⑳ 2/1(金) 本間喜一学長へ報告（豊橋校舎）。翌2/2、関係者への報告会（車道校舎）。救援本部解散（2/2）

2. 2月捜索（第二次捜索、2/28-3/5）

毎日、中日、産経新聞協力、鈴木重彦OBら。薬師平C3（第3キャンプ）発見

3. 3月捜索（第三次捜索、3/23-4/5）

名古屋大学春山合宿（リーダー垣田宏治氏〔文4〕）による友情捜索。

3/23、東南稜で5遺体発見（尾崎、八橋、加藤+林田、小田）

3/25、2遺体発見（武藤、牛田）

3/31、薬師沢右俣森林帯で茶毘に付す。

4. 4月捜索（第四次捜索、4/26-5/8）富田健治部員ら10名

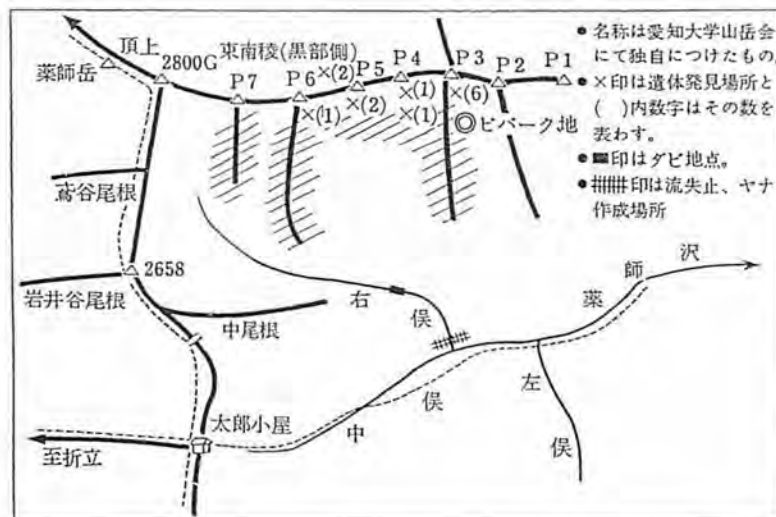
4/29、5/2両日に4遺体発見（横地、春日井、福島、山田）。5/3茶毘

5. 捜索パトロールと捜索活動の終了（5/8-8/20）

5月より愛知大山岳部関係者が遭難想定地域を継続的にパトロール。

「大パトロール」実施 8/17-8/20。総勢61名（中日、8/17）。

参加大学編成……愛知大関係17、愛知学院大12、中京3、名工大10、名商大7、名市



遺体発見の東南稜/薬師沢周辺図
 (『同窓会設立40周年記念誌』62頁)

大5、名古屋4、南山4、名城8 + 東海地域
社会人山岳会

1月14日、名古屋車道校舎に救援対策本部を設立して以来7ヶ月余り、救援捜索活動に参加した人数は延べ3,000人、ここまでの費用約600万円に達していました。3月に東南稜で7遺体を発見、さらに4月捜索で4遺体を発見処理してきていましたが、残る2遺体は発見されないままでした。鈴木重彦OBの弟・俊彦君、それにこの合宿ではいつも鈴木俊彦リーダー候補と一緒にラッセルにでていた1年生部員・鳶田郁夫君です。5月の雪解け時期をまって山岳部では現役残留部員を中心にローテーションを組んで遭難想定地域のパトロールを継続的に行なっていましたが、その総仕上げとして8月17日より3日間、太郎小屋をベースに名古屋地域の学生、社会人岳人あがての「大パトロール」を実施しました。

捜索の開始以来、薬師岳東南稜の東側、即ち黒部溪谷側は捜索に踏み込むのは危険であるとの判断から捜索対象の地域から除外してきていました。稜線直下の最終ビバーク地近くPI (2,650m) 地点から黒部溪谷・奥の廊下の沢芯までの標高差は約900mあります。雪のある時期に東南稜の雪庇（セツピ）を踏み外すと一気に数百m転落して黒部溪谷側へ落ちることになります。したがって捜索対象地域としては薬師岳東南稜より西側地域に限定して実施してきていました。

「大パトロール」は、東南稜西側地域である薬師沢右俣を中心に行われました。3日間、そば降る小雨のなか、はい松帯のなかに分け入り捜索がおこなわれましたが空しい結果におわりました。

2遺体を残したまま組織的な捜索活動を終了して遭難対策本部を解散しました。

解散の翌8/21、参加者一同は折立登山口の慰霊塔「十三重之塔」除幕式（不参加の金子公則君〔経1〕父親が建立）に参列して帰名したのでした。

6. 最終遺体の発見（10/14、10:30、鈴木、鳶田）

8月20日をもって組織的な捜索活動は終了し

遭難対策本部も解散しました。しかし子どもの遺体を野晒しにしたまま、また冬を迎えるのは忍びない。一日も早く子どもを親元の家に戻してやりたいと願うのが親の心情です。この気持ちから始まったのが遺体がまだ見つからない家族による独自捜索でした。

鳶田郁夫〔経1〕君の父親俊員氏は、遭難対策本部解散後、9月16日より発見に至るまでの捜索山行は3回目でした。発見当日、10月14日は大学と太郎小屋関係者らと鳶田氏の三者で「10月15日には今年の捜索を終了して下山する」と約束した日の前日でした。

鳶田氏らは、これまで組織的な捜索活動が危険地域として対象除外地域としてきていた黒部溪谷に入り、双眼鏡での捜索と特異物らしきものを見付けると急斜面のガレ場をよじ登って確認するという方法で活動を続けてきていました。当日、鳶田俊員氏、五十島博文氏、佐伯文蔵氏ら6名は薬師沢小屋の拠点を、朝、7:00に出発。黒部溪谷奥の廊下を下り立石付近、東南稜黒部側に3本出ている沢のうち中央の沢を約1時間、およそ500m登った「はい松帯」の急斜面のガラ場で鈴木君、その場所よりやや上部の岩陰で鳶田君の遺体を発見したのでした（太郎小屋主人・五十嶋博文氏、講演資料「忘れられない13人の死」より）。午前10時30分。まさに「親の一念」でした。

最後に発見された2遺体は、黒部溪谷奥の廊下河原で茶毘に付されました。

7. 遭難事件の清算

10月14日、最後の遺体の発見で全13遺体が茶毘に付されたこととなり、1963年11月10日、約1,000名が参列して「合同慰霊祭」（豊橋校舎体育館）が行われました。対策本部長（胡麻本先生）が経過を報告、脇坂雄治学長の弔辞を述べて慰霊祭は終了しました。

その後、遭難報告書『薬師』（1968年9月刊）の編纂発行となります。

当初、「1億円の捜索費」といわれた費用も警察、

自衛隊、友情搜索、地元住民、地元企業、山小屋、ガイドなどの全面的な賛助協力で実際の出費は予想外と少なく、また社会的関心の高かった事件だけに各方面から多額の義捐金が寄せられました。義捐金名簿によれば同窓生を含め、幅広い範囲の各種団体、会社、個人から多くの厚意が寄せられたことにあらためて驚くばかりです。

これら愛知大学山岳部の薬師遭難に寄せられた多くのご厚情に深く感謝する次第です。

収支報告

収入10,300千円

（大学拠出金1,500千円、義捐金など8,800千円〔うち同窓会1,200千円余、父兄会約2,300千円〕）

支出10,300千円

（捜索活動費8,300千円、追悼式・報告書1,000千円、寄付金1,000千円）

IV. 遭難当日の両大学山岳部員の行動

このようにして遺体収容と慰霊祭は終わりましたが、この太郎小屋を拠点に正月の薬師岳を目指した愛知大学と日本歯科大学山岳部両パーティが、登頂を企てた1月2日を中心とどんな動きをしたのか関心の深いところです。43年前の「新聞切り抜き」17冊と遭難報告書『薬師』を読み返し、愛知大学隊の記録（遺品の日記、遭難誌『薬師』）と日歯大隊リーダーの行動記録報告（1/17、リーダー佐竹信従氏、朝日新聞1/18刊ほか、遭難誌『薬師』より）の要点を抜粋して同日の両隊の行動を構成してみます（行動表参照）。

両隊の入山行程は、愛知大学隊が12月25日夜、名古屋出発、富山より富山地铁で千垣（有峰口）へ。そこからトラックが有峰林道の途中まで利用できて26日夕刻には全員、有峰に到着しています。これに対して日歯大隊は24日夜、上野発、富山より高山線猪谷へ。バスで土集落、土からはトラックを利用して入り、25日、大多和峠・北陸電力(株)有峰監視所泊。26日は神高木材事務所泊。

27日、有峰到着となります。両隊は登山口の地点で1日のずれがありました。

1. 愛知大学隊 CⅢ設営（薬師平）、そして全員アタックへ

〔12/29〕愛知大隊、富山県側有峰口より一部トラック利用で入山。太郎小屋に入る。

〔12/30〕強風、ときどき雪。薬師平ヘラッセル。

〔12/31〕強雪風。太郎小屋より先の行動は休止。11:45、愛知大サポート隊4名、日歯大隊6名（リーダー佐竹信従氏、3年、24歳）高山線猪谷より岐阜県大多和を経て入山。この日、太郎小屋に入る。1階を日歯大、2階を愛知大が使用と相談。

〔1/1〕強雪風。両隊とも行動休止（沈殿）。

〔1/2〕一時、風雪おさまる。5:40、愛知大アタック隊、サポート隊ともに太郎小屋を出発。7:40、薬師平着、CⅢ設営。

7:20、日歯大隊、アタックに太郎小屋出発。8:20頃、薬師平通過。8:35愛知大隊、サポート要員5名を含む全13名が日歯大隊を追って頂上アタックに向う。森林帯を抜けたあたりで愛知大隊、日歯大隊に追いつく。頂上への稜線上、風速20~30m、地吹雪、視界0m。両隊、稜線上を並行するようにして行く。

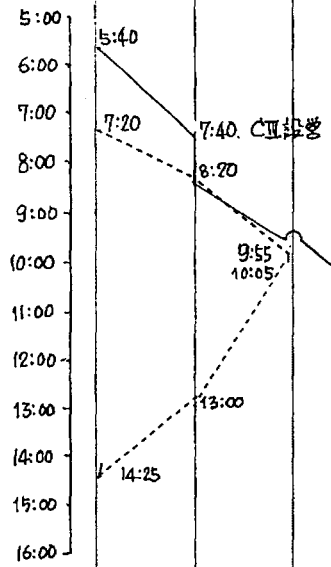
2. 頂上直前から東南稜へ

9:20、頂上手前約400m、先行の愛知大隊がややながく留まったのを日歯大隊が追い越して頂上へ。愛知大隊は頂上直前の留まった地点で撤退を判断9:40、帰路へ。「次薬師」より西北の風雪に追われるようにして東南稜へ迷い込む。この時点では方向を間違えた意識はまったくなかった様子。11:00、ビバーク（緊急露営）地点到着、風雪を凌ぐ。13:30、より適切なビバーク地点を求めて行動開始、2時間半後、16:00、最終ビバーク地点に到着。16:20、二組に分かれてビバークする（山田、林田、鈴木、武藤、春日井、小田、横地）、（加藤、尾崎、鳶田、八橋、福島、牛田）。

行動表

凡例 ——— は愛知大隊
 - - - - - は日産大隊

日付	名峰 (富山) (干垣)					有峰	折立 BC	1900 ^m 三飯	太郎小屋	葉師平	頂上	東南稜 ビシノ池奥
	東京	富山	好和	監視所	神高							
12/24												
12/25	晴											
12/26	雨 ^{as} 晴											
12/27	晴					①		鈴本	武藤 高田			
12/28	快晴					②		林田 春時 小田 横地	鈴本 高田			
12/29	晴								山田 鈴本			
12/30	下: 快晴 ^{as} 上: 曇 ^{as}	雨	強風					雨降沈没	沈	鈴本 武藤 加藤 八橋 高田 手田		
12/31	風雪								沈			
1/1	雪								西隊沈			
1/2	快晴 ^{as} 地吹雪											
1/3	風雪								沈			記録不足
1/4	地吹雪 ^{as} 晴											
1/5	晴 ^{as} 地吹雪											
1/6	快晴 ^{as} 晴											
1/7	雪											
1/8	快晴 ^{as} 雪											
1/9	晴 ^{as} 雪											
1/10	快晴 ^{as} 晴											
1/11												



愛知大学山岳部OB 山田義郎 2006年5月31日作成 07年4月29日改1

1/3の記録、「ラジオでは北海道で遭難があったそうだが、われわれは絶対に帰る。その気力十分。どうしてこんなところにこのままの状態としておろう（ママ）」（尾崎）、「一年生が相当疲れている」「われわれは道を間違えたようだ」（林田）。

冷静さと意思のちから。のちに発見される遺体の状況からすると遭難死に至るのは1月4日以降の一両日と考えられます。

3. 太郎小屋への帰着と下山

一方、日歯大隊は9:55~10:05頂上。その後、下山開始。途中、三度、進路を失ったがその都度サブリーダー2名が組んでルート偵察。13:00頃、薬師平の愛知大C IIIを通過。

薬師平から頂上登り1時間35分だったところを下りに2時間55分。また、薬師平-太郎小屋間、登り1時間を下りに1時間25分をかけて太郎小屋に14:25帰着。

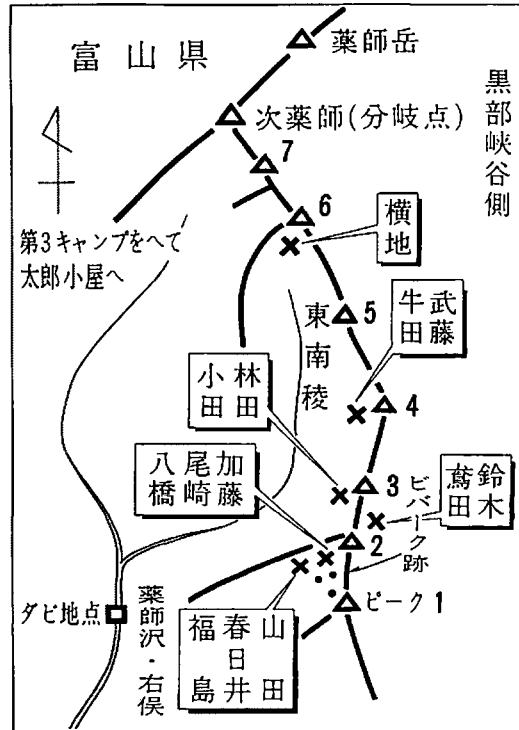
4. 「全員遭難」と「死地脱出」の間

愛知大隊のメンバーは1月4日以降にビバーク地点（加藤、八橋、尾崎+春日井、福島、山田）と、東南稜の尾根筋（武藤、牛田）（林田、小田）、東南稜P6直下（横地）、東南稜黒部側斜面（鈴木、鳶田）をそれぞれの死地としました。（東海山岳No.1遭難現場見取図参照）。

日歯大隊は太郎小屋から薬師頂上への登りに要した合計時間2時間35分に対して降り4時間20分の時間をかけましたが全員が無事、太郎小屋に帰着しました。

しかし日歯大隊の恐怖の脱出行はまだ続きます。

- 〔1/3〕地吹雪。太郎小屋に沈殿
- 〔1/4〕地吹雪、夕方に晴。食料が今夕食分しかなく下山開始、ラッセル腰まで、1,900m テントに到着できず途中の森林帯でビバーク
- 〔1/5〕晴から地吹雪。途中1,900m テントを撤収して折立飯場に入る
- 〔1/6〕曇のち晴。猪根平（有峰）を通過して有



遭難現場見取図
 (『東海山岳』No.1、1964年刊、105頁)

峰西谷・神高木材(株)事務所に入る

- 〔1/7〕雪。大多和峠にでられず有峰湖畔の途中でテント泊、ラッセル腰まで
- 〔1/8〕雪降ったり止んだり。大多和峠・北陸電力(株)有峰監視所泊。東京に電報
- 〔1/9〕晴のち雪。食料切れる。ラッシュタクトイックス（速攻作戦）で脱出、大多和集落・吉田長右衛門氏宅泊
- 〔1/10〕曇のち晴、富山
- 〔1/11〕東京

辛うじて「死地脱出」した日歯大隊と「全員遭難死」した愛知大隊との間にはどんな違いがあったのでしょうか。

報道では「学校ごとの競争? (1/22、朝日)」、「寝袋も片付けず (1/23、朝日)」、「雑然とした太郎小屋 (1/23、中日)」、「競争心から無理を (3/5、産経)」、「磁石・地図、置去り (1/23、朝日)」、「浅かった冬山経験 (1/23、東京)」、「スパルタ式訓練 (1/29、中日)」、「問題になった太郎小屋の状況 (2/18、週刊新潮)」、「標旗は1本もみつから

ず(8/22、毎日)」、「山岳部の性格と部員構成(8/22、毎日)」などなど。厳しく批判されました。

山岳部関係者としては、たとえどんなに時間が経過しても風化させてはならない事件として、なんどでも反芻して検討し、反省しなければならないのが、ご厚情をいただいた皆さま、遭難死した13名の山岳部員とその家族に対する務めであると認識しています。

大きな関心をお寄せ頂き多大なご支援を頂戴した皆さまと大学当局に対し感謝し、遺憾の意を表明いたしますとともに痛恨の極みながら薬師山行の敗北を認めざるを得ません。

V. 遭難——本間喜一学長の辞任と全学をあげての搜索活動

1月22日、太郎小屋に山岳部員たちが居なかったことが朝日新聞で報道されて4日後、26日、学長本間喜一先生は辞意を表明されました。

「全員が無事に帰ったらみんなの前であやまらせるつもりだった。しかしこうなるとは私が高を丸めてあやまらなくてはならなくなった。学生を預かる私たちに落度があったから、教育のやり方に何かミスがあったからだと思うわけです(朝日1/29)」との談話です。

第1搜索隊として徒歩で太郎小屋に入った一行の責任者として、報告会もそこそこ、豊橋・大学本部学長室に出頭を申し渡されました。当然、一喝を覚悟して階段を昇り学長室のドアノブを押しました。しかし、そこに見たのは学長のにこやかな笑顔と「太郎小屋の状況は新聞記事通りだったかね」との確認。あとは労いの言葉だけでした。覚悟のうえでの出頭ただけに狐に摘まれた思いでした。

学長の辞表提出の翌日、各学部は教授会を開き「学長の意思は尊重するが、愛知大学の今後のために辞表は撤回していただきたい」と全教授の態度を表明します。大学内では学長留任の動きと学生の起こした事故に対する責任の取り方について

騒然となります。

週刊新潮'63-2/18号特集記事は、先生方たちへのインタビューを通して当時の大学内の状況をつたえています。

「学長は教育者としての責任をおとりなつた。(……)しかし、こういうことが再び起こらないように全学的に考える。そのときに指導者としていろいろおしえていただきたい。そのために、学長のポストにふみとどまってもらいたい」、「本間先生は愛大の創立者だ。つまりオヤジだ。オヤジはいたほうがよい。だから本間先生は愛大にいないてはいけない」、「学校内のすべての面に責任を負うということは中学校の校長の段階まで(……)学生は紳士として認められたことであり、学生はそのことに対し、自らの責任ある行動をとるべき(……)」、「大学の公的事業ということで、最終的責任は学長にあるかもしれない。だが(……)山岳部に本間先生がどこまでタッチしていたか(……)ちょっと、責任が持てない状態だ」といった留任論から、「愛大山岳部は統制が厳しいことで中京地区では高く評価されてもいる。何がいったい起こったのか。それをまず考えるべきだ」、「太郎小屋の状況は、大学のクラブ活動、学生の気質の悪いところが露呈したといえるだろう。私の友人は名古屋大学の山岳部のコーチをやっているが、その友人は、愛大の山岳部のことを、スパルタ式でたいへん成果をあげている山岳部であると高く評価していた。しかし、不幸なことに、そのカゲの部分が太郎小屋に現われたのだ。(……)太郎小屋の乱雑さは、愛大全体のもっている弱さが出たものだ。学長のそういう考えをハッキリ読みとらなければいけない(……)」など大学運動部が陥りがちな組織体質論。

さらには、「だっ子が、やっちゃいかんということをやってしまって、どえらいことになったというケースだと思うんだ。しかし、だからといって、その父親が知らん顔ではすまされない。(……)しかし、やめられては困るからね」といった学生だっ子論にいたるまで。オーナー大学

としてではなく、海外学校からの引揚げ学生と先生たちで造り、大学に集まった先生方たちの共同経営で学生たちとともに歩いてきて17年。その間に、さまざまな紆余曲折をへながらようやくひとり歩きができそうな先がみえてきた時期だけに事情は深刻でした。

しかし、学長の辞意は固く、結局、辞表は受理されました。週刊誌の特集記事では、さらに「天災地変にも責任を負う」、「学長のポストにいらなくても、ちゃんとやっていくつもりだ」と語っておられます。「生命は地球よりも重い」「たとえ大学がつぶれても救助・捜索活動は行う」（新聞談話）も当時の学長の言葉で、これらの学長の言葉と姿勢とを基本的に捜索活動は全学をあげての取り組みとなっていたのです。

遭難発生当初から実行責任者は対策本部長・胡麻本篤一先生でご尽力されました。一方、本間先生は学長辞任後も細心の配慮を配りながら、幅広いこれまでの人脈を駆使して影で動かれ、「最終意志決定者」でした。

辞任の直後、山岳部関係者に「いっさいの弁明をしてはいけない」と一種の緘口令が本間先生から申し渡されました。以来、長年に涉って薬師遭難に関しては口をつぐんできました。遭難当時の関係者の一人として、学長の辞任決意の鍵になったのは太郎小屋で山岳部員が食事の後始末などをしていなかったことであつたと考えています。本間先生は、辞意決意に至った理由についてはひと言も発言しておられませんが、食後の不始末などは申し開きのできない種類の事柄であつたからです。

全学を上げての支援体制は、大学同窓生らも加わり現地対策本部の置かれた富山では富山市在任の森田明同窓会富山支部長（当時）、富山県警本部警務部長（当時）中根三郎氏らから陰に陽にお力添えをいただきました。それとともに地元企業（北陸電力、前田建設、神高木材など）及び太郎小屋の五十嶋博文氏と佐伯文蔵氏ら通称立山ガイドの皆さんに全面的なご協力をいただきました。

遭難発生以来、一貫して捜索現地の一線にいた筆者には、これらのご厚意がひととき暖かいものを感じられました。

また、自衛隊、富山県警、岐阜県吉城地方（跡津・佐古・大多和集落）の皆さんらの献身的なご尽力には忘れられないものがあります。

VI. 遭難の残した影響

ヘリコプターによる大報道合戦と山岳記者の確保

薬師遭難はマスコミの各媒体で大々的に報道された全国規模の事件であつただけに思いも及ばなかった方面にさまざまな影響を及ぼしました。

積雪期には一般的には入ることが困難で、かりに入るとしても大掛かりな取材体制を編成した専門家集団のみが立ち入ることのできる領域なだけに、各マスコミは知恵と経済力を背景に総力をあげての取材体制をとり大報道合戦となりました。そのなかで出てきたのが当時としてはまだ珍しかったヘリコプターによる取材でした。各新聞社が富山などの基地にヘリコプターを幾日も待機させて離陸の天気待ちをしながら現地入りのチャンス待ちました。そんななかで僅かな機会をつかんで最初に太郎小屋入りを成功させたのが朝日新聞でした。さきに述べた朝日新聞ヘリが太郎小屋に強行着陸し「来た、見た、居なかった」の見出しの一報を報じたのです。この見出しは現在まで語り継がれるほど有名です。この遭難事故を通じてヘリコプター取材が一般化していきます。

ついで遭難事件後に各マスコミが対応を急いだのが山岳記者の増強です。報道合戦を通じて自社に「山や」と呼ばれる専門の「山岳記者」が在席しないことが明らかになったことによるものです。また、第1次捜索取材からはスタージャーナリストが誕生しています。

山小屋のヘリコプター荷揚げ

遭難取材は当初よりヘリコプターが要員、機材の輸送で活躍しますが、その後、輸送手段として

のヘリコプターが山小屋にとって必ずしもコストの高いものではないことが明らかになってきて、その後は山小屋の食料、機材、資材などの輸送はもっぱらヘリコプター輸送にたよるようになっていきます。小屋について「冷たいビールをまず一杯」という贅沢もヘリコプター輸送が一般化したお陰によります。この結果、これまでの山小屋のボッカによる荷揚げは消滅していきます。

県警山岳救助隊と登山届出条例

遭難発生の危惧が生じた1月14日、愛知大学は富山県警に捜索願いを提出し、富山県警では第1次捜索から届出に対応したかたちで薬師岳遭難現場に要員を派遣しますが、それはあくまでも緊急の対応編成であって特別に訓練された専門集団ではありませんでした。このときの経験と反省を生かしたかたちで富山県警では、昭和40（1965）年3月、山岳救助隊が発足します。これは富山県警が管内に薬師岳だけでなく剣岳、立山など登山者の多い山岳地域を担当して、それだけ遭難事故が多いという事情によりますが、このような事情はその他の山岳地域を管内にもつ各県警も事情は同じことで、富山県警につづいて長野、岐阜、群馬県などの警察本部にも山岳救助隊が組織されることになっていきます。

さらに翌昭和41（1966）年3月23日には富山県登山届出条例が剣岳周辺の山域を対象に施行されることとなります。続いて群馬県でも谷川岳周辺山域に登山届出条例が施行されることになりました。

愛知大学山岳部の廃止と大学山岳部の衰退

山岳部はこのような経過のなかで昭和39（1964）年、大学に休部届を提出し、翌年、昭和40（1965）年1月に受理されました。その後、山岳部員たちの熱い思いで昭和41（1966）年4月、大学から休部状態の解除が認められ活動を再開しました。しかし、その年の夏山合宿中、鹿島槍赤岩尾根の一般登山道で新入部員が急病死する事故

が発生し、山岳部は廃部届提出の止む無きにいたりしました。その後、山岳部設立の要望はなんとか学生から大学側に出されましたが、許可されるにはいたらなかったと聞き及んでいます。

以後、愛知大学には山岳部は存在しません。

日本の山岳界は、戦前から大学山岳部がながい年月をかけて実績を積み重ねて歴史を造ってきました。戦後、登山が一般化するとともに岩登りを中心に社会人山岳会のメンバーが活躍するようになります。大学山岳部と社会人山岳会双方の活動が並行した時期もありましたが、薬師遭難後の昭和40（1965）年ころから社会人山岳会の台頭が目覚しく、それとともに各大学とも山岳部入部希望者が減少傾向を続け、現在では輝かしい歴史と実績をもつ大学の山岳部でも廃部寸前の状態に追い込まれているのが現状です。

VII. 残った者たちのその後のそれぞれ

このようにして結果的に全13遺体を処理して捜索活動は終了しました。その後、遭難学生の遺族たちのまとまりは固く、遭難学生遺族の慰霊登山活動がはじまりました。この活動は遭難学生のご両親が元気で太郎小屋に入れるあいだながく続きました。

遭難の翌夏以来、春日井繁雄・はなご夫妻（遭難部員・春日井幹二君ご両親）は23年間の薬師慰霊登山を続けられた。その登山に同行していた幹二君の妹さんは山の魅力に見せられて太郎小屋でアルバイトとして働くようになり、のち同じように小屋で働いていた夫君と結ばれて太郎小屋で挙式。高天原山荘（五十嶋博文氏経営）支配人夫婦として長年勤められました。

一方、捜索活動に参加した現役部員の学生たちのなかには就職の時期を逸して1年間、就職延期をせざるを得なくなったものもあり、OB捜索隊員のなかには捜索活動に参加するための休暇がとりにくく在職の会社を退職し、捜索終了後、あらためてあたらしい会社に就職せねばならなくなっ

たもの。搜索で山に入る日が多く会社との関係がまずくなり転職せざるを得なくなった転職組もできました。

遭難後の長い年月のあいだでは、街の歯医者から日本歯科大学病院に回されて担当歯科医グループの責任者が日歯科大リーダーだったという患者と医師の出会い、もと日歯大隊メンバーの開業歯科医と現在ではロータリアン同士の付き合いという奇遇な話もあります。

愛知大学入学後は山岳部に入部して活動したいと希望していましたが、生憎、山岳部が休部中のため他の大学山岳部に育成を依頼した例もありました。生田浩君（故人、昭和42年卒、名古屋校舎・経済、日本山岳会東海支部マカルー遠征隊員）の場合、高校時代（愛知高校）山岳部に所属、山岳部活動にあこがれて愛知大学に入学しましたが山岳部は遭難直後で休部中であったため、山岳部OBの働きかけでかれの高校時代の関連大学である愛知学院大学山岳部にお願いして育成してもらった例などもありました。

（注）太郎小屋は、1965年、田部重治氏書の看板設置を機会に「太郎平小屋」と改称。

主な参考・使用資料

- 愛知大学遭難誌『薬師』
『東海山岳』No.1（日本山岳会東海支部、1964年刊）
『週刊新潮』（昭和38年2月18日発行号）
『愛知大学通信』116号（愛知大学広報課、1996年11月6日発行）
『愛知大学五十年史』（愛知大学）
『朝日新聞』（1963年1月16日、18日）
『産経新聞』（1963年3月25日）
『毎日新聞』（1963年1月19日）
『中日新聞』（1963年1月22日）ほか
1963年「山日記」
2002年（平成14）同窓会全国総会（豊橋）記念誌『愛知大学同窓会50年のあゆみ』
『近代日本総合年表』（1968年、岩波書店刊）
『太郎平小屋——30周年を迎えて』五十嶋文一、博文発行、1985年刊
『東海山岳』No.1（日本山岳会東海支部、1964年10月刊）
『決定版・昭和史』15巻（毎日新聞、1984年刊）
「忘れられない13人の死」五十嶋博文、2006年富山支部総会講演資料

